

友愛会から総同盟へ —鈴木文治と松岡駒吉の軌跡

間宮 悠紀雄

(友愛労働歴史館事務局長)

はじめに

友愛会は1912（大正元）年8月1日、鈴木文治により東京芝のユニテリアン教会・惟一館（現在の友愛会館）で創立された。後に松岡駒吉の主導により総同盟（戦前・戦後）へと発展し、戦後は全労会議、同盟を経て、現在の中央労働団体・連合（日本労働組合総連合会）となった。このため友愛会は日本労働運動の源流とされている。

ところで友愛会について「広辞苑」（岩波書店）は、「1912年鈴木文治らが創立した労働組合。初めは共済・修養機関の色彩が強かったが、全国的組織に発展して、1921年日本労働総同盟と改称」と記し、初期の友愛会を「共済・修養機関」としている。

また、NHK高校講座「日本史」は友愛会について、「労働を国家や文明を支える『神聖』なものとしたうえで、労働者自身の『相愛扶助』『識見の開発、徳性の涵養、技術の進歩』『地位の改善』によって差別と偏見を取り除いていこうとしたのである。それは、工場主や資本家に対して、同じ人間であることを認めてもらいたいという人格承認の願いでもあった」¹と記述し、友愛会を「人格承認要求の団体」とする。なぜ初期の友愛会は「修養機関」とされ、「人格承認要求団体」とされたのか。

本稿は友愛会を創立した鈴木文治や、友愛会を総同盟へと発展させた松岡駒吉の思想と運動について記述するが、最初に二人が所属し、友愛会誕生の地となったユニテリアン

教会の思想と運動（ユニテリアン・ミッション）に言及したい。

ユニテリアン・ミッション

慶応義塾の福沢諭吉や明治政府の金子堅太郎らの招聘により1887（明治20）年、キリスト教プロテスタントの一派、米国ユニテリアン協会のアーサー・メイ・ナップ牧師が来日。1889（明治22）年にはナップ牧師やクレイ・マッコレー牧師らが来日し、東京市麹町区でユニテリアン・ミッションがスタートした。

1894（明治27）年、東京・芝の地にユニテリアン教会・惟一館が建設された。東西宗教文化の融合を願うユニテリアン教会は、仏教徒を教会長に招き、個人の尊重、自由と寛容、進歩と発達への貢献、科学的合理的な思考などを日本社会に広めようとした。

惟一館では1898（明治31）年、ユニテリアンの安部磯雄や村井知至らにより社会主義研究会（後に日本最初の社会主義政党・社会民主党へ発展）が設立された。1912（大正元）年にはユニテリアン教会の鈴木文治により友愛会が創立された。このため惟一館は今日、「日本社会主義運動発祥の地」とされ、また「日本労働運動発祥之地」とされている。

土屋博政氏（慶大名誉教授、牧師）は、二つの論文「社会運動の源流、ユニテリアン—宗派性を超えたキリスト教の影響をたどる—」²、「惟一館なくして友愛会なし—日本ユニテリアン協会と友愛会発足—」³で、ユニテリアンと社会運動、友愛会について論じてい

る。また、田村剛明治学院大学教授らは「友愛会は、キリスト者である鈴木文治が中心となって、ユニテリアン・ミッションの伝道活動の一つとして始められた労働運動団体」⁴と記している。

ユニテリアン・ミッションとはなにか。それはユニテリアン派キリスト教思想の伝道・普及をさしているのか。そうならば一見、キリスト教とは無縁と思われる大衆運動（社会主義運動と労働運動）が、なぜユニテリアン教会から生まれてきたのか。

参考になるのが土屋博政氏のユニテリアンの定義と彼らの行動。土屋氏は「ユニテリアンとは、諸宗教、諸思想は異なって見えても、究極的には一つと見て、自分と他者が掛け替えのない存在と考え、各々を尊重し、自由と寛容を大事にする、これらを信条とする人々」⁵と定義する。

ユニテリアン教会には個人を尊重し、自由を大事にする人々が集まり、教会解散後はそれぞれの立場でユニテリアンとしての信条を広げていった。土屋氏は「彼らは自由のための運動」を選んだと述べ、①政界に入った人々（安部磯雄、内ヶ崎作三郎、小山東助、永井柳太郎、鈴木文治、松岡駒吉、星島二郎、市川房枝）や、②教育や文学、著述に専念した人々（内藤濯、今岡信一良、岡田哲蔵、帆足理一郎、原一郎、工藤直太郎、三並良、会津常治、武田芳三郎、坪田譲治、吉田絃二郎、沖野岩三郎、一条忠衛、加藤一夫、岸本能武太）を紹介⁶している。

特に政界に入った人々について土屋氏は、「彼らはキリスト教界を越えて、政治界で自由の拡張（選挙権拡張、言論・思想の自由など）を求めた」とする。しかし、彼らの思想や立ち位置は、きわめて幅広い。河上丈太郎⁷や大山郁夫⁸までをユニテリアンに含めると、保守から左派までを含み、まとまりがない。

しかし、ユニテリアン・ミッションを土屋博政氏が言う「自由の拡張」、ユニテリアン教会の内ヶ崎作三郎牧師（後に政治家）が言う「社会問題の解決」と理解するならば、彼らのミッションが見えてくる。彼らはそれぞ

れの立場で、それぞれの信じる方法でユニテリアン・ミッション（自由の拡張、社会問題の解決）を実践したのである。

鈴木文治・友愛会とその軌跡

ユニテリアン・ミッションの一つとして友愛会を創立し、「日本労働運動の父」と呼ばれたのが鈴木文治（1885～1946）である。彼は宮城県栗原市生まれ。子供のころ、近くの金成ハリストス正教会で洗礼を受けている。苦学して旧制山口高校を卒業後、郷里の先輩である吉野作造、内ヶ崎作三郎らと同じ東京帝国大学を卒業。大日本印刷や朝日新聞を経て、1911（明治44）年にユニテリアン教会・惟一館の職員になった。翌1912年に友愛会を創立し、友愛会時代を牽引した。1930（昭和5）年に総同盟会長を退いた後も、衆議院議員として、社会運動家として活躍し、1946（昭和21）年に死去。著書に『労働立法論』『労働運動二十年』他がある。

友愛会は大正デモクラシーの嚆矢となり、①穏健な名前と活動、②東京帝大卒の鈴木文治の信用、③ユニテリアン教会の多彩な人脈、などにより人々の支持を得て、組織を拡大していった。また、松岡駒吉や西尾末広など労働者出身の運動家、賀川豊彦らの社会運動家、さらに野坂哲（慶大）や久留弘三（早大）ら学卒者の友愛会入りにより、組織は拡大・充実していった。

友愛会は1917（大正6）年の日本製鋼室蘭製作所の争議で政府と対決し、厳しい弾圧を受けるようになり、多くの脱会者を出した。一方で米騒動、ロシア革命、第一次世界大戦の終結とILO（国際労働機関）の創設などを背景に、日本の労働運動は大きな高まりをみせていた。

1918（大正7）年、友愛会の活動の重点は関西に移り、第六周年大会は大阪で開かれた。1919（大正8）年、友愛会は第七周年大会を機に大日本労働総同盟友愛会と改称し、友愛会時代は終わって近代的労働組合へ進んでいく。1921（大正10）年には日本労働運動史に残る神戸の三菱・川崎争議を闘い、日本労働総同盟と改称する。この頃、総同盟を主導

したのは「自由労働組合」を掲げ、神戸連合会を率いていた賀川豊彦であり、彼が第七周年大会の「宣言」と「主張」を執筆し、組織の近代化・戦闘化をリードした。賀川豊彦は今日、「日本労働運動の母」と呼ばれている。

鈴木文治は友愛会綱領（1912年）を執筆したが、そのポイントは「人格条項」と呼ばれる第2項「我等は公共の理想に従ひ、識見の開発、徳性の涵養、技術の進歩を図らんことを期す」にある。

この人格条項を持つ組合を、「友愛組合」とか「人格向上主義労働組合」と呼ぶ。これは米ロバート・F・ホクシーの「労働組合主義の5つの基本的類型」の一つであり、友愛会は「友愛的・人格向上的組合主義」の労働組合とされる⁹。初期の友愛会が「修養機関」とか「人格承認要求団体」と呼ばれたのは、この人格条項による。それこそが鈴木文治のめざしていた組合であり、友愛会は労働運動におけるユニテリアン・ミッションだったのである。

松岡駒吉・総同盟とその軌跡

鈴木文治の後を受けた松岡駒吉（1888～1958）は、「健全なる労働組合主義」を確立し、「日本労働運動育ての親」と呼ばれた。松岡は鳥取県岩美町生まれで、18歳の時に丹後教会で洗礼を受けている。いくつかの職場を経て1910（明治43）年、室蘭の日本製鋼所に入職。1917（大正6）年に友愛会本部専従となり、1925（大正14）年、総同盟関東労働同盟会会長になり、野田労働争議などを主導している。

戦後、松岡駒吉は労働運動再建の呼びかけ人となり、1946（昭和21）年には総同盟会長、全織同盟会長に就任した。1947年の片山内閣で総同盟は、西尾末廣を官房長官、米窪満亮（海員組合）を初代労働大臣に送り込み、松岡駒吉は衆議院議長に就任している。著書に『野田労働大争議』『労働組合論』があり、彼の思想、運動を説明する言葉として①「産業人論」、②「健全なる労働組合主義」、③「現実主義労働運動」がある。

松岡は「国民生活の向上につながる産業の発達を第一の目標に掲げ、それを実現するた

め的手段として組合の必要性」を主張した。彼は「産業において最も重要な問題は労使関係の合理化」とし、その基本的問題は「労働者の団結権の確認と、これに伴う団体協約権の確立」にあるとした¹⁰。

ここで団体協約とは「資本家が労働組合を公認し、労働条件協定の相手方として其の団体交渉を認め、それに依って成立する協約を以て個人契約に代えること」であり、その意義は①資本家の絶対専制の打破、②合理的産業平和の構築にあった¹¹。

松岡は団体協約の円滑な運営のためには、①団体協約を否認する左翼組合の排除、②資本家から独立した組合の存在、が不可欠とした。彼は「団体協約の円滑なる進行には、労使ともに権利と義務を果たす必要がある。然るに左翼組合の侵入、その無責任な扇動、妨害は、団体協約そのものを半身不随とする」とした。

また、「資本家の意思に左右される御用組合では、組合に対する組合員の関心と興味は失われ、あらゆる自主的訓練の動力たる組合員の情熱も努力も呼びおこすことは困難である」とし、「御用組合では『産業人としての労働者』の訓練は不可能であり、結局、国民生活の向上につながる産業の発展を期すことはできない」としていた。

松岡は労働組合の堅実なる発達が行われるならば、①産業内に民主主義が確立される、②産業内における労使の関係に進歩と新秩序が建設される、③労働者の産業人としての自主的訓練が行われる、と考えていた。しかし、当時の労働者は近代的産業人としての訓練が乏しいため彼は「共同精神、独立、社会的責任、常識を有する労働者」を、「産業人に訓練する場が労働組合」とした。これが松岡の「産業人論」である。

「産業人論」を掲げた松岡の前に立ちはだかつたのが左派勢力、階級的労働組合主義の労働組合であった。労働組合主義を掲げ、労働組合の自主性を守ろうとする松岡にとって、「労働組合は革命のための学校」と嘯き、労働組合主義を“経済主義”と批判して、革命や政治目的のために組合を利用しようとす

る左派グループは、最大の敵であった。外部の政党の支配・介入を排し、労働組合主義を守ろうとした松岡は1925（大正14）年に評議会系左派組合を除名（総同盟第一次分裂）した。

一方、彼は企業の中に閉じこもり、経営者・資本家の意思に左右される企業内組合を「企業縦割御用組合」と批判していた¹²。松岡にとって外部の政党支配を受け自主性を失った労働組合も、自らの労働条件に汲々とする企業内組合も“不健全”な“御用組合”であった。松岡はこれらの組合を否定し、自らの労働組合は“健全”な労働組合主義を実践している、としたのである。

「産業人論」と「健全なる労働組合主義」を確立した松岡駒吉は、「現実主義労働運動」を実践していく。それは「一筋に現実の労働者の利益を守る運動」であり、具体的には①団体協約締結運動の実践、②労働運動の拠点作り、③労働者教育の実践、④共済事業への取り組み、などであった。

松岡は1930（昭和5）年に安部磯雄・賀川豊彦・新渡戸稲造・吉野作造らの支援を得て旧ユニテリアン教会・惟一館を買収し、日本労働会館を建設。彼はここを拠点に全国12の分館を運営し、労働学校の展開や共済事業への取り組みを行った。それは労働会館運営の他、アパート青雲荘・友愛病院の運営、宿泊所（大井町）や食堂（神楽坂）の経営であり、また罷業相互金庫や保険事業への取り組みであった¹³。こうして松岡駒吉と総同盟は、「現実主義労働運動」を実践したのである。

おわりに

戦前の友愛会・総同盟は、①鈴木文治が主導していた1912年から1918年頃までの友愛会（人格向上主義労働組合）の時代、②賀川豊彦が主導した1918年から1921年頃までの総同盟化の時代、③総同盟が左派勢力に翻弄された1921年～1925年頃までの混乱する総同盟の時代、④そして松岡駒吉が主導した1925年～1940年までの健全なる労働組合主義の総同盟の時代、に分けることができよう。

鈴木文治はユニテリアン・ミッションの一

つである友愛会で、キリスト教的「隣人愛」を実践しようとした。しかし、それは理想主義的・人格向上主義的であり、「修養機関」と揶揄される一面を持っていた。賀川豊彦は友愛会を近代化し、総同盟へと発展させた。松岡駒吉は賀川豊彦が去った後の総同盟から共産系組合を排除し、「健全なる労働組合主義」を確立して現実の労働者の利益を守り抜き、組織を発展させた。

友愛会の近代化、現実化による総同盟への発展は、反面で鈴木文治と初期友愛会が持っていた理想主義、人格向上主義の性格を弱めるものであった。現代の労働運動に求められるのは初期友愛会が持っていた思想、理念、即ち鈴木文治が示唆していた「友愛組合（人格向上主義労働組合）」に目を向けることではないだろうか。

友愛会創立から100年後の2012年、UAゼンセン（前身は全織同盟、初代会長は松岡駒吉）が結成されたが、その綱領は「私たちは、労働を通じて、技術を磨き、品性を高め、識見を啓発することによって、人格の向上と完成を図ります」と記している。日本で最新・最大の産業別組織は、松岡駒吉の現実主義労働運動を実践しながらも、鈴木文治の理想主義、人格向上主義の理念を今もしっかりと踏まえているのである。

1 NHK高校講座「日本史」80頁 2006年

2 土屋博政・政策研究フォーラム『改革者』2009年5月号

3 土屋博政・政策研究フォーラム『改革者』2012年8月号

4 田村剛・RALF Silke 明治学院大学研究所年報「友愛会労働運動の軌跡」1995年

5 土屋博政・友愛会創立記念講演「ユニテリアン主義と友愛会の精神」2008年

6 土屋博政・友愛労働歴史館講演「解散後のユニテリアンたち」2012年

7 友愛労働歴史館企画展「内ヶ崎作三郎－教育者・牧師・政治家の生涯－」2017年

8 市川房枝著『市川房枝自伝・戦前編』41頁 1974年

9 小川登著『労働組合の思想』46頁 1981年

10 松岡駒吉著・総同盟機関誌『労働』8月号「産業合理化と労働組合」1928年

11 松岡駒吉著『労働組合論』（クララ社）32頁以下 1929年

12 松岡駒吉著『労働組合論』（クララ社）41頁 1929年

13 財団法人日本労働会館発行『財団法人日本労働会館60年史』1991年